国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成27年3月1日発行　第39巻第3号通巻第450号

# 月刊みんぱく

2015 3月号

## 特集 益虫 害虫

虫と歩む人類史　池谷和信

―野蚕の宝庫インド　上羽陽子

―じつは身近にあるラック　北川美穂

害虫か、精霊か　阿部朋恒

「害虫」という呼称の危険性について　池田光穂

# お化けをかぞえる

化野（あだしの） 燐（りん）

プロフィール
1964年、岡山県生まれ。妖怪研究家。作家。評論家。東アジア怪異学会会員。考古学の学芸員を経て、1999年「幻想文学」（アトリエOCTA）誌上にてデビュー。おもな著書に「人工憑霊蠱猫」シリーズ（講談社ノベルス）や「考古探偵［法師全］」シリーズ（角川文庫）などがある。

妖怪の出てくる小説を書いて、民俗学史の研究めいたことをしていると、こんな質問をされることがたまにある。

「妖怪って、どれぐらいの数いるのですか？」

質問した側はそんなに真剣な気持ちで聞いたのではないはずだ。だいたいの数を答えればきっと納得してくれるのだろうが、自分はつい真面目に考えこんでしまうのだ。

野生動物でも数えるみたいに、何匹ぐらいいるのかという意味ならば、想像上の存在が幾千億あるかなんて問いに答えようはない。どれぐらい資料が残っているのかという質問だとしても、正確な数など解るはずがない。きっとどんな大学者にだって、答えることなんかできないだろう。

では、どう答えればいいのだろうか？

ついこの間までは、正直に「解らない」と答えていた。けれど、去年、ある研究発表をしてからは「よく言い伝えられている類型の妖怪はだいたい二百十種ぐらい」と返すようにしている。

これは、決していい加減な数ではない。

見えるのか、聞こえるのか、触られるのかどんな感覚によって知覚されるのか。どんな形や音として認識されるのか。人間にどんな影響を与えるのか。そんなさまざまな属性の組み合わせとして言い伝えにある妖怪たちをみなおして、頻出する類型を抽出して数える作業をした結果、得られた数字だ。

たとえば、木でも伐るような怪しげな音が聞こえてくる類型がある。〝天狗倒し（てんぐだおし）〟とか〝木伐り坊（きぎぼう）〟と名づけられるものだ。これを名が違うだけなのに、それぞれ別に数えていたのではきりがない。けれど、これらを同じ仲間の「怪音・伐採型」と名づけて、ひとつの類型だと把握する。こうしてやれば、随分とすっきりして、妖怪はあつかいやすくなる。

実はこの分類を行ったのには、もうひとつの理由がある。次に是非ともやらなければと考えていることがあるのだ。

たとえば、「怪音・伐採型」の霊的存在なのだが、南米アマゾン川の流域にも、〝ヤシンゴ〟という名前のこれとよく似たモノの言い伝えが残されているらしい。

なぜ、そんな遠く離れたところに？

大昔にどこかで生まれた伝承が遠く離れたふたつの土地に伝わったのか、それともヒトが怪しいと感じる物事は世界のどこでも似たようなものだからなのか。

属性による分類をもとに、そんな視点からお化けの国際比較はできないものか。

最近、僕はそんなことばかり考えている。

月刊 みんぱく
3月号目次

1 エッセイ 千字文
お化けをかぞえる
化野 燐

特集 益虫 害虫

2 虫と歩む人類史
池谷 和信

4 野蚕の宝庫 インド
上羽 陽子

5 じつは身近にあるラック
北川 美穂

7 害虫か、精霊か——ダニをめぐるエピソード
阿部 朋恒

8 「害虫」という呼称の危険性について
池田 光穂

10 集めてみました世界の○○
はきもの編
韓 敏

12 みんぱく Information

14 文化遺産おもてうら
文化遺産の「国際的」保護——何が正しいのか
佐野 真由子

16 多文化をあきなう
足元から築くフェアな社会
——フェアトレードタウン運動
渡辺 龍也

18 味の根っこ
カレリア・パイ
庄司 博史

20 異聞逸聞
数々の思い込み
八杉 佳穂

22 制服の世界、世界の制服
異性をまとう
久保 正敏

24 次号予告・編集後記

特集

# 益虫害虫

**益虫か害虫か。人間にとって有用か有害かによって、よりわけられてしまうムシたち。ムシにはムシの事情があるのに、人間様のご都合で益虫が害虫に、害虫が益虫に入れかわることもある。そんな裏腹なムシと人間とのかかわりをさぐる。**

## 虫と歩む人類史

池谷（いけや） 和信（かずのぶ）
民博 民族文化研究部

美しい翅（はね）をもつモルフォチョウは、愛好家のあいだで高額で取引されている

### 虫のイメージ

現代の日本において虫に対するイメージは一般によくない。ゴキブリのいない家にくらし、ハエや蚊のいない環境がよりよいとされる。虫をみるのもいやだという人が、とくに若い世代では多くなっている。これは、わたしたちの文明が、かんだり、病気をもたらしたりする虫の除去につとめてきた結果、虫に触れる機会が少なくなったからであろう。それでは、人類は、どのように虫たちとつきあってきたのであろうか。地球上のさまざまな地域の事例から考えてみよう。

### くらしに虫あり

人類の歴史の九九パーセント以上は狩猟と採集をなりわいの中心とした時代であったといわれる。アフリカのカラハリ砂漠のサン社会では、狩猟の際に虫が欠かせない。というのは、弓矢猟の際には、矢尻につける毒が不可欠で、その毒は、地中にくらす甲虫の体液なのである。誰が、最初にこのことを思いついたのかはわからないが、この毒のおかげでキリンやカモシカ（アンテロープ）の類も捕獲することができる。この他にも、ギューノーと呼ばれるイモムシがタンパク源のひとつになっている。女性たちは、雨季になるとイモムシを探し求める。最近では、イモムシが商品となっていて、泊まりがけのキャンプをつくって大量に採集する。

人類が農耕を開始して農地を拡大させるにつれて、人と虫との激しい攻防も始まった。人類の栽培した作物は人にとっても虫にとっても食糧源になるからだ。世界中の農耕社会では、バッタやイナゴやカメムシは害虫になったが、ラオスやタイなど、それらを食用とする地域も少なくない。農耕時代の虫対策がいかにたいへんであったのか、日本国内において害虫を駆逐して豊作を祈る虫送りの儀式が発達したことからもうかがわれる。一方で、アマゾンの焼畑社会では、数十匹の巨大アリに手をかませ、その痛みに耐えた者を成人とみなす儀式がある。

近代に入ると、殺虫剤のような農薬が生まれて、人が虫を克服したようにもみえる。しかし、それにともない、水田では虫以外の生き物もいなくなり、生物多様性を失うことになった。一方で、ミツバチとカイコは例外である。ミツバチは受粉にも有用で、ハチミツの需要はどの地域でも高く、養蜂は世界の隅々まで広がっている。先進国ではローヤルゼリーが健康食品として知られているほどだ。日本の近代では、養蚕と製糸業が経済の中心であった。また近年、デパートでは、カブトムシやクワガタムシなどの観賞用虫のブームが過熱している。

### 一〇〇億倍の虫たち

以上のように、人類にとってもともと虫は食糧などとして有用であったが、農耕化や産業化にともない多くの虫は害となり否定的に位置づけられてきた。そして、人とは無関係の虫がいることも忘れてはならない。現在、地球の人口は七〇億人を超えているが、地球の虫の数は、その一〇〇億倍以上にも達しているといわれる。今後、地球の食糧不足を克服するのに虫を無視できないという人がいる。人類の未来を考えたとき、一方的に虫を殺すという考えは危険である。地球のなかで、いかに人と虫は共存できるのか、虫に対する人類の知恵をふりかえりながら未来を展望することが大切ではないだろうか。

市場で売られていたイモムシ（ラオス）

ミツバチを飼うためのハチドウ。しめ縄が巻かれているものもあり、人とハチとの関係を考えるうえで興味ぶかい（長崎県対馬）

上：ラオスの市場で売られていたイモムシ（右）とバッタ（左）。お皿の一山で、1万キップ（約150円）する
下：ブラジルのアマゾンの焼畑社会の成人儀礼でもちいられる巨大アリ。標本番号H0110847

# 野蚕の宝庫インド

上羽陽子
民博 文化資源研究センター

ソム（*Persea bombycina* Kost.）とよばれるクスノキ科の葉を食べるムガサンの幼虫

## 絹をうみだす絹糸昆虫

絹糸昆虫とは、チョウ目昆虫のなかで絹を分泌する昆虫の総称で、世界に一〇万種あるともいわれている。幼虫期の末期にタンパク質性の糸を吐いて繭をつくり、サナギのあいだはそのなかに籠もる。そのため繭は成虫へと変態する場所として紫外線遮断、保温、防水、湿度調整、抗菌作用、抗汚染物質などシェルターの役割をもっている。絹が紫外線防止機能や吸・放湿性に優れ、保温力が高いのはこのためである。さらに染色性にも優れ、天然繊維で唯一の長繊維として珍重されてきた。染織以外にも、和楽器の弦、釣り糸、手術用縫合糸、コンタクトレンズ、人工皮膚・血管など多様な場面で活用されている。また、サナギは食糧資源や飼料としても利用されてきた。

室内に吊られたカゴの上で飼養されるエリサンの幼虫

「お蚕さん」とは、カイコガ科のカイコ（*Bombyx mori*）で桑葉を食べて屋内で人に飼養されるため家蚕とよばれる。一方、野蚕とは、ヤママユガ科などの野生の絹糸昆虫で、桑葉以外を食べる。屋内飼養の家蚕に対する呼称であるが、完全な野生ではなく、人間の管理下におかれた飼料樹によって半飼育され、品種改良などもされている。

野蚕の分布は世界中にみられるが、インド、中国、東南アジアなど熱帯圏に有用な種属が多い。なかでも、野蚕の原型といわれているのが、インドのアッサムだけに生息しているムガサン（*Antheraea assamensis*）である。ムガサンだけではなく、インドにはタサールサン（*Antheraea mylitta*）、エリサン（*Samia ricini*）など実用価値の高い種属が生息しており、野蚕の宝庫として知られている。

## 野蚕の魅力

家蚕のカイコは、繭の色が白色になるように品種改良され、約二昼夜かけて長さ一五〇〇メートルの繭糸を吐き続けて繭をつくりあげる。一方、野蚕は、鳥などの外敵から身を守るために黄・茶・金・紫褐色といった保護色で、家蚕よりも防衛機能が発達した繭をつくりあげる。そのため、白くて長い均一な家蚕糸とは異なり、長さは短いが（種によって異なるが五～六〇〇メートル）、色味があり、節や張りなどの特徴がある。家蚕糸にはない風合いと防衛機能、希少性から野蚕糸はインド国内外で注目されてきた。

例えば、ムガサンは糸や織布にすると艶のある金茶色になる。近年では、ムガサン糸によるサリーなど、野蚕糸の魅力を全面にだしたファッションが流行している。また、タサールサンは、インドの中・東北部に分布し、濃茶褐色の繭をしている。絹糸昆虫でもっとも太く張りがあり、独特の風合いの布地をうみだすことができる。

野蚕のなかでも特徴的なものにアッサム原産といわれるエリサンがある。現在は、アッサムをはじめ、中国やベトナムなどでも飼育されている。その特徴は家蚕よりも強健で成長が早く人工飼料にも対応でき、飼いやすいことである。アッサムでは、ボドの人びとが生業として家屋でヒマの葉を与えて飼養をしている。

一定の太さにするため8つのタサールサン繭を集めて一本の生糸にする

エリサンの紡ぎ風景。長い生糸がとれないため、サナギを取り出した繭を真綿状にしてから紡ぐ

エリサンは二重繭層のボカ繭のため、長い一本の糸を挽くことができず、羊毛や木綿の短繊維と同様に糸紡ぎが必要である。しかし、そのため風合いは羊毛布よりは艶があり、木綿布よりはしっとりとしているのが特徴であり、その独特な肌触りからショールなどとして珍重されている。

このようなインドにおける野蚕文化を支えるのは、食樹の種類が豊富であり、しかもその多くが常緑樹であるという環境と、飼養から糸づくり、製織までを家内手工業的に小規模におこなう生産形態である。さらに、野蚕の研究開発を国家が主導して国立研究所を設置してすすめてきたことも大きな特徴であり、今後もさらに野蚕利用の新たな展開をインドでみることができるであろう。

# じつは身近にあるラック

北川美穂
工藝素材研究所主宰／工芸技法材料研究家・修復家

## 世界最古は日本に

「ラック（lac）」とはラックカイガラムシの雌が植物の樹液を吸って分泌する樹脂で、塗料の「ラッカー」の語源である。紀元前三世紀ごろのインドの『アタルヴァ・ヴェーダ』第五巻には薬用としての利用の記述があり、正倉院には天平勝宝八歳（西暦七五六年）の『種々薬帳』の記録とともに、現存する世界最古のスティックラック、「紫鑛」が所蔵されている。精製され、薄片に加工されたものは「シェラック（セラック、シケラックとも）」とよばれ、工業製品を含めたさまざまな分野で利用されている。

## 一年に二度の収穫

ラックカイガラムシ（*Kerria lacca*）は現在、おもにインド、タイ、中国などの熱帯雨林地区で養殖がおこなわれている。気温が氷点下に下がると死滅してしまうため、残念ながら日本で

は生きた実物を見ることができない。ラックカイガラムシには大きくわけて「クスミ種」と「ランギーニ種」の二系統があり、後者は多種の木で育つことにより世界全体での収量は多いが、前者の方が透明度と強度に優れた樹脂が採取できるため、インドでは現在半々の割合で養殖されている。およそ半年で卵から成虫となり、一年に二度の収穫がおこなわれ、精製された製品が世界各国に輸出されている。

### 薬から電気製品まで

薬としての利用の他、含まれる赤色色素は古代から染織品や絵画などに利用されている。近年、高松塚古墳の壁画をはじめ、アジャンターや敦煌などユーラシア大陸各地の洞窟壁画でのラックの利用が確認され、一〇世紀以上も鮮やかな色を保ち続ける希有（けう）な有機色素として文化財関係者の注目を集めている。

右：クスミ種のラックカイガラムシの第三期幼虫。大きく細長いのが雄、小さく丸いのが雌
左：同、脱皮、交接後、雄は三日以内に死滅し、雌は樹脂を分泌しはじめる。白い綿状のものは呼吸のための空間を確保するために樹脂とは別に分泌する蠟。脱皮した雄の抜け殻が見える。（写真、左右ともインド、ジャールカンド州ラーンチーのインド天然樹脂研究所の実験農園にて。2014年12月19日）

セイロンオーク（*Schleichera oleosa*）からクスミ種ラックを収穫する農民。（ジャールカンド州フシルハトゥ村、2014年12月21日）

熱可塑性のある樹脂は古くは封蝋（ふうろう）のような接着材料として用いられていたが、高純度のエタノール（酒精）の精製が可能となった一七世紀後半から、ラックをエタノールに溶かしたラックワニスが塗料として広く用いられるようになる。漆のない欧米諸国ではこれを用いた疑似漆技法「ジャパニング」も流行した。

落とすと割れたSPレコード盤はシェラックで作られていた。絶縁性のあるラック樹脂は電気部品の接着剤として用いられるほか、人体への毒性がなく、体内に残留しないことから、粒状のチョコレートやガム同士の付着防止兼光沢剤や、ミカンやリンゴから水分の蒸発を防ぎ、新鮮さを保つフルーツワックスとして、そしてラック色素はイチゴシロップや小豆餡（あん）など、我々の身近な食品に使われている。

### 所変われば害虫に

第二次大戦中までラックは重要な軍事物資であり、当時日本の統治下にあった台湾で養殖実験がおこなわれた。終戦後、養殖地はそのまま放置されていたところ、近年、果樹園のライチの木にラックカイガラムシが繁殖、害虫扱いされているという。ラック養殖ではカイガラムシに対しての病害虫防止が重要な課題となっており、七〇年余りを経て台湾の自然環境に順応し、病害虫にも強い可能性のあるラックが今後活用されていくことを期待している。

ハンドメイド・シェラック製造の様子（ジャールカンド州ブンドゥ、グプタ・ブラザーズ・シェラック工場、2014年12月21日）

日干しレンガ造りの物置きにセメントを内張りして改装し、筆者がおよそ20か月間滞在した部屋。みながいぶかしがるのを振り切ってこまめに布団を干し続け、村でもっともダニの少ない寝床を維持してきたと自負している（雲南省紅河州紅河県のハニ族村落、以下同。2013年6月14日）

# 害虫か、精霊か
## ――ダニをめぐるエピソード

阿部（あべ）朋恒（ともひさ）
首都大学東京大学院博士後期課程

### 見えるダニと見えないダニ

二〇一三年の春ごろより、マダニの媒介による感染症、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）の脅威が、世間で大きく取り沙汰されるようになっている。ただでさえ悪い印象のつきまとうダニだが、ますます「害虫」の烙印（らくいん）が消しがたくなってしまったようである。

なかでも、肉眼で容易に視認できるほど大きな図体をもつマダニの仲間は、とくに目の敵にされやすい。たとえば、英語圏ではマダニ類をtick、そのほかのダニをまとめてmiteとよびわけており、前者に嫌悪のまなざしが向けられる。顕微鏡や計測器を持ち出してくる科学的な作法はいざ知らず、生身の感覚からすれば、目に見えるものと見えないものに線を引いて考えるのは、むしろ当然のことだといえるだろう。

### ハニとダニ

わたしが調査をおこなっている中国雲南省のハニ族の村でも、「見えるダニ」と「見えないダニ」では扱いが異なる。しばしば家畜の血を吸って腹を膨らせているところを目撃されるマダニ類は、確かに虫の一種として認識されている。しかし、それ以外のダニたちは、単に「いない」ことになっているのである。「見えない＝いない」という姿勢はじつにわかりやすいのだが、ときとして厄介な問題を招くこともある。

住み込み調査をはじめた当初のことである。ものの一か月足らずのうちに、わたしの身体には二百箇所以上もの噛みあとが刻まれ、花が咲くかのように膿（う）んで腫れ上がっていた。すぐさま件の節足動物を元凶と見定めたわたしは、布団を干し、ノミとり粉を寝床にまぶし、まめな行水と洗濯を心がけ、ネズミにはネコで対抗し……と、思いつく限りの手を尽くして、この「害虫」を身辺に近づけないよう対策を講じた。

しかしそれは、まさに孤立無援のドン・キホーテさながらのたたかいであった。普段は酒飲みから野良仕事まで何につけ頼りになる村の兄弟たちも、「夜な夜な忍び寄る見えない虫」のことになると、なにを与太話と笑ってとりあってくれなかったのである。

# 「害虫」という呼称の危険性について

池田 光穂
大阪大学
コミュニケーションデザイン・センター教授

## 価値と実害

わたしは「医療人類学」という医学と人類学を架橋（ブリッジ）する学問を研究している。ブリッジするとは、医学を人類学的に解釈分析すると同時に、人類学もまた医学のまなざしのもとで反省的な精神を取り戻す営為である。したがってまず「害虫」をどのように医学がとらえるのかを考えてみよう。

害虫学は、さまざまな学問に支えられている。ざっとみても、農業昆虫学という中核研究のほかに、医学領域においては医学生態学、医学動物学、医学昆虫学、毒物学、寄生虫学などが関連する。これらの諸領域の基礎学問は生物学である。生物学は生命現象を客体化して研究する。客体化とは、これが良い／悪いという価値判断を差し控えて中立的な観点から実験、分析することである。もちろん「捏造」も

## 「ニハ」のしわざ

では、害虫でないとすると、わたしの身体を無残に蝕んだのは何だったのか。村人たちはそれを、「ニハ」のしわざだという。外からやってきた人間は、この土地の水になじむまで、雷や囲炉裏の火に関連するニハの影響を受けやすいのだそうだ。ニハは大に小に悪さをおこなうが、人間はニハを見ることができない。いわば精霊のような存在であり、安全と健康を保つためには、生贄で宥めてこれを遠ざけておかねばならないのである。

手持ちの軟膏薬も尽きてから、わたしもニハ払いをおこなってもらった。なるほど、村に来て半年ほども過ぎるころには、どんなに怪しい布団にくるまって寝ても、さほどの症状は出なくなっていた。はたして害虫への免疫がついたのか、精霊を追い払うことに成功したのか、それはいまだにわからない。

上：「ニハ」を払う儀礼をおこなう、モビとよばれる儀礼職能者（2013年9月8日）
下：煮炊きをおこなう囲炉裏。外からやってきた人間は、ここではぜる火の粉にまつわる「ニハ」の影響を受けやすいのだという（2013年11月10日）



許されない。では、そのような学問からどうして、良い／悪いという判断が含まれる害虫という概念が出てくるのか？　それは人間に対して危害（ハザード）を起こす潜在危険性（リスク）という観点から理解し、価値判断による偏見を「中和化」しているからである。この中和化のメカニズムを「南京虫」の事例で説明しよう。

## やっかいなものはどこから来る？

南京虫（トコジラミ学名：*Cimex lectularius* L. 1758）は、英語ではベッド虫（Bed bug）という吸血性の五ミリメートルほどの昆虫（カメムシの一種）である。文字通り、ベッドのなかで夜間に吸血するときに出す唾液のために噛まれるとアレルギー反応が出てとても痒い。蚊に刺されたときにも痒いのだが、これらは唾液を出して血液の凝固を防ぐためだといわれている。おなじカメムシの仲間でもシャーガス病を媒介する吸血性サシガメ（五〇種類以上いる）にくらべて、南京虫の伝染病媒介リスクは少ない。問題はなぜこの名前に南京という地名が割り当てられているかである。もちろん中国起源の昆虫ではない。したがって客観的を旨とする科学者は決して南京虫とはよばない。どうもこれは「やっかいなものは中国（＝唐國）からくる」という和人の偏見に基づくものらしい。だからそんな偏見に怒る神戸元町の華僑は「いっそのこと神戸虫と名付ければどうか？」と皮肉る始末である。博物学者の田中芳男（一八三八―一九二六）は南京虫の来歴を幕末の中古外国船の輸入と関連づけて神戸港を中心とした流行発生を報告しているからだ。もちろん害虫学者は、無関係な外国人への偏見と関連づけられた南京虫という用語は研究の場では使わない。他方、ベッド虫は、ナチスによるユダヤ人虐殺に先立つ時期に、ユダヤ人はトコジラミと同様に「社会的害虫」であると反ユダヤ主義の宣伝に使われた。幕末の神戸での流行が、日中戦争期の一九三七年一二月の「南京虐殺」に決して繋がるものではないが、この地名の偶然の符合というのは、あまり気味のよいものではない。

## 押された烙印

全体主義や戦争というストレスフルな状況は、人間のあいだにある人種的偏見を、人間以外のものに喩えて、そのあいだの嫌悪感を増長させるだけでなく、統治者や軍隊はその体制や戦争を遂行するためにその喩えや偏見を積極的に利用すると、ジョン・ダワーは『容赦なき戦争』（平凡社）でいっている。そのときには、人間によって「害虫」の烙印を押された虫どもの不快なステレオタイプを動員することがとても便利になるのだ。その意味で、わたしは「害虫」という命名がいささか独善的であり、その文化的な誤用があまつさえ危険なものであることを、このコラムで指摘した次第なのである。

「リベレーター」つまり自由解放者アメリカの虚像。奴隷制度、KKKによるリンチ、拝金主義、そしてユダヤ人が、ヨーロッパの町を爆撃により破壊しているメッセージが読みとれる。アメリカのイメージは人間と、羽根のついた昆虫（脚が三対6本）のハイブリッドとして表現されている。中央左下にある「アメリカ合衆国は、破壊からヨーロッパ文化を救済に来るだろう」（オランダ語）*から、恐らくナチスドイツ親衛隊（SS）により1944年当時占領下にあった当地で配布されたと思われる。
WWII Propaganda：コロンビア・カレッジ（ミズーリ州）の歴史授業の資料に関連するページより
http://www.ccis.edu/courses/HIST102mtmcinneshin1/WWIIprop.htm

* De U.S.A. zullen de Europeesche Kultuur van den ondergang redden.

# 集めてみました世界の

韓 敏（はん みん）　民博 民族社会研究部

靴、サンダル、下駄、ブーツなどは、足の保護やファッションのために着用されてきた。

ゴムや合皮が普及するまでに、人びとは、藁、魚の皮、木、布など、身近の材料でさまざまなはきものを考案してきた。長い歴史のなかで、実用性重視からファッション重視へ変わったものもある。例えばハイヒールは、17 世紀のフランスで、町にあふれる汚物を踏む面積の少ない男女共用の靴として発明されたが、今日では女性たちの愛用品となっている。

はきものは、まさに人類の英知と創造力を表象するものだ。

※寸法の単位はセンチメートルです。

**フィンランド**
樺皮製の靴。やわらかく軽い樺皮の靴は、焼き畑などの野良仕事や浅瀬での漁業に使われていた。ヨーロッパ展示場にて公開中。
H7.8 x W12 x D28
H0002890

**フランス**
フランスで使用されていた伝統的な木靴。安全防具として農民や工場労働者などに愛用されていた。
H9.2 x W13 x D33
H0003402

**中国（安徽省）**
安徽省北部蕭県李瓦房村で収集された。秋から春先まではく。柳の木や葦の花、牛の毛などで作られる。下駄の歯が高く、素材の保温性がよいので、防寒、防水の機能が抜群である。老若男女に愛用されていた。
H16 x W9.1 x D22
H0254387

**中国（陝西省）**
中国では、1950 年ごろまで漢族女性のあいだで纏足（てんそく）する風習がおこなわれていた。これは纏足をした女性（陝西省戸県）が自分のために作った布の靴である。
H5.8 x W6.1 x D15
H0268450

**インド**
バラモンの男の子は、寺院で白い腰布と木のサンダルのみの行者の姿で通過儀礼をおこなう。寺院では、皮のはきものは禁止されているので、このような木のサンダルを用いる。
右）L7.3 x W8.3 x D26
左）L7.8 x W8.6 x D25
H0104570

**カメルーン**
ヤウンデ市で収集され、フルベやフラニー民族のあいだで使用されているスリッパである。
H7.8 x W11 x D30
H0006066

**日本（北海道）**
北海道旭川市で収集された鮭皮製靴。アイヌ語でチェㇷゲリという。大人の靴一足を作るには、鮭3〜4本分の皮が必要だ。
右）H16 x W14 x D28
左）H17 x W14 x D29
H0062235

**カナダ**
ケベック州イヌクジュアク村で収集されたイヌイットの人びとの長靴である。
H31 x W12 x D22
H0212859

**日本（秋田県）**
秋田県で収集されたわらぐつ。保温性にすぐれ、雪のときの歩行に欠かせなかった。中国東北部にもわらぐつはあったが、日本のほうがずっと種類が多い。
H35 x W13 x D31
H0014851

**ボリビア**
ラパス市で収集された。中央アンデス高地のカーニバルなどの悪魔踊りの際に使用されるブーツである。
右）H22 x W27 x D10
左）H23 x W27 x D11
H0004528

## 展示場リニューアルのお知らせ

**南アジア展示・東南アジア展示がいよいよ3月19日（木）新オープン！**

みんぱくでは、すべての展示場を順次、刷新していく計画を進めています。

### 南アジア展示

南アジアは、豊かな自然環境のもと、さまざまな宗教や文化、社会集団が共存しあう知恵を育んできました。信仰やくらしの技の多様性、独特の発展を見せる大衆文化や染織文化の展示をとおして、躍動する南アジアの姿を紹介します。

リトゥ・クマール
デザインの婚礼衣装

### 東南アジア展示

起源を異にする民族がさまざまな生活スタイルでくらす東南アジアでは、民族や文化が入り組み、異種混淆（いしゅこんこう）の世界が広がっています。「東南アジアの1日」をコンセプトに、その多彩な文化を紹介します。

魔女ランダ
／インドネシア

**公開講演会**
**「いやし旅のウラ？表？——現代アジアツーリズム考」**

「ケア」や「癒やし」を目的としたツーリズムに焦点をあて、その現状の一端を講演者の現地での研究に基づいてお話しします。

日時　3月20日(金)18時30分～20時45分（開場17時30分）
会場　オーバルホール（大阪市北区梅田3－4－5毎日新聞社ビルB1）
※参加無料、要事前申込、参加証必要
**お申し込み・お問い合わせ**
本館　研究協力係
電話　06・6878・8209

**国際ワークショップ**
**「民族学資料の展示への利用とソースコミュニティとの協力関係」**

従来から協力関係を抜きにしては活動できなかったロシアとアメリカ、そして日本と同様に近年そのような関心を持ち始めた韓国の、「国立」もしくはそれと同レベル以上の規模と経営母体を持つ博物館の展示の諸問題の事例と比較研究を行います。

日時　3月10日(火)10時～18時
会場　本館第4セミナー室（定員20名）
※参加無料、申込不要、先着順、ロシア語・英語（逐語通訳あり）

**公開フォーラム**
**「世界文化遺産「ナスカの地上絵」の研究と保護をめぐる国際協力」**

南米の古代アンデス文明を代表する「ナスカの地上絵」は、世界文化遺産に登録されながらも、学術的解明はまだ途上です。総合的に取り組む日本チームの成果を紹介しつつ、破壊の危機に瀕した地上絵の保護について、ペルー人研究者とともに討議します。

日時　3月19日(木)14時～16時30分
会場　本館第4セミナー室（定員80名）
※参加無料、申込不要、先着順、日本語・スペイン語（逐語通訳あり）

**みんぱく春の遠足・校外学習事前見学&ガイダンス**

春の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。新しくなった展示についても研究者が展示場で説明します。

日時　4月3日(金)、4月6日(月)
14時～16時30分(受付13時30分～16時)
会場　本館第5セミナー室ほか
**お申し込み・お問い合わせ**
ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにお送りください。
広報企画室　広報係
電話　06・6878・8560

**国立民族学博物館・金沢大学共同開催**
**文化資源シンポジウム**
**「文化資源の保存・継承に向けた国際協力」**

本館と金沢大学との間で締結された学術協定に基づくシンポジウムです。両機関において独自に進めてきた文化資源の保存と継承に関するプロジェクトを紹介し、接点をさぐることで、今後共同で実施できる研究事業を模索します。

日時　3月29日(日)13時30分～17時30分
会場　石川県政記念しいのき迎賓館（金沢市広坂2－1－1）
※参加無料、申込不要、先着順（定員70名）
主催　金沢大学
共催　国立民族学博物館
**お問い合わせ**
金沢大学国際文化資源学研究センター
電話　076・264・5788

**みんぱくミュージアムパートナーズ**
**「点字体験ワークショップ」**

目で読む文字から手で読む文字へ。点字で異文化コミュニケーションを体験してみませんか。

日時　3月14日(土)12時～15時30分
4月11日(土)12時～15時30分
会場　本館エントランスホール
※参加無料、申込不要

**「西アフリカの昔話を語る」**

素朴でどこかなつかしい西アフリカの昔話をお話しします。

日時　3月8日(日)11時30分～12時
会場　本館エントランスホール
※参加無料、申込不要

**みんぱく創設40周年記念　カレッジシアター**
**「地球探究紀行」**

総勢18人の研究者が驚きと感動をお届けします。世界の文化の〝奥深く〟へご一緒にどうぞ。今月で最終回です。

時間　13時～14時30分
会場　あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込（参加状況により当日受付あり）、参加費各回1000円
主催　産経新聞社
特別協力　国立民族学博物館、千里文化財団

3月4日(水)
**西アフリカを掘る——発掘から見えてくる「中世」アフリカの歴史**
講師　竹沢尚一郎（本館 教授）

3月11日(水)
**韓国の食の世界——ご飯**
講師　朝倉敏夫（本館 教授）

3月18日(水)
**日本とアイヌ民族——隣人としてくらす**
講師　齋藤玲子（本館 助教）

**お申込み・お問い合わせ**
ウェーブ産経カレッジシアター係
06・6633・9087

**※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。**
**※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。**



## みんぱくゼミナール

時間　13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は観覧料が必要です）

第442回　3月21日(土)
**ミシンと家庭**
**——100年前のグローバル商品**
講師　森明子(本館 教授)

20世紀初頭にドイツ(上)と日本(下)で販売されたシンガー社のミシンと説明書、本館所蔵

ミシンは、1900年ころ一般への販売がはじまり、まもなくシンガー社の製品が世界の市場を席巻するグローバル商品になりました。世界中が産業化に邁進していった時代、家庭にはいったミシンとともに、各国で「消費者」の姿があらわれてきます。ここでは、ヨーロッパと日本について、お話しましょう。

## みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

時間　14時30分～15時30分
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）
本館の研究者が来館された皆様の前に登場します！

3月1日(日)　本館ナビひろば
**言語の調査とはどういうものか**
話者　吉岡乾（本館 助教）

3月8日(日)　本館ナビひろば
**鶏からみた世界史：アジアの森から世界の台所へ**
話者　池谷和信（本館 教授）

3月22日(日)　本館ナビひろば
**災害の記憶とコミュニティ**
話者　竹沢尚一郎（本館 教授）

3月29日(日)　本館ナビひろば
**パプア・ニューギニアのタイムカプセル**
**——ジョージ・ブラウン・コレクション**
話者　ピーター・J・マシウス（本館 教授）
※日本語・英語（逐語通訳あり）

**●南アジア・東南アジア展示リニューアルのお知らせ**

展示リニューアル工事のため、南アジア・東南アジア展示場を閉鎖しています。

期間　2015年3月18日(水)まで

**●施設一部閉鎖のお知らせ**

改修工事のため、講堂地下休憩所「くつろぎスペース」を2015年3月5日(木)～3月18日(水)まで閉鎖しています。

**●無料観覧日のお知らせ**

3月15日(日)は万博記念公園ふれあいの日のため本館展示を無料で観覧いただけます。

## 刊行物紹介

■上羽陽子 著
**『インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ（フィールドワーク選書）』**
**臨川書店　2,000円（税抜）**

牧畜を主な生業とするラバーリーの人びと。彼らの染織品に魅せられた著者は、実際に刺繍、糸紡ぎ、牧畜用具づくりなど現地の製作者に教えを乞い、様々な手工芸の習得に取り組むなかで、ものづくりとは何か？を模索します。みずからの手を使い、つくることを通して異文化を知っていく過程を丁寧に綴った一冊です。

■佐々木史郎 著
**『シベリアで生命の暖かさを感じる（フィールドワーク選書）』**
**臨川書店　2,000円（税抜）**

北方ユーラシアでの民族調査とはどのようなものかを、フィンランド北部のサーミ、中国内モンゴル北部のエヴェンキ、ロシア・シベリアのネネツ、エヴェンなどの人々との出会いを中心に紹介します。

## 友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

**友の会講演会（大阪）**

第441回　4月4日(土)14時～15時10分
会場　本館第3セミナー室（当日先着順、会員証提示）

世界の食文化を学ぶ①
**つくられる地域の食**
**——スローフード発祥の地、イタリアから考える**
講師　宇田川妙子（本館 准教授）

モノと情報が行き交う現代、日本における地産地消をはじめ、食の安全や地域再興といった文脈のもと、地域に根差した食を実践化する傾向が数多く見られます。一方で、ローカルな食の形成には、市場や国家、人びとの移動等、グローバルな現代社会の様相が複雑に関係するといわれています。食の安全だけでは語ることのできないローカルな食の形成について、イタリアを例に考えます。

■講演会終了後、講師を囲んで茶話会を開催します（1時間程度）。

第442回　5月2日(土)14時～15時10分
会場　本館第5セミナー室（当日先着順、会員証提示）
**躍動する南アジアの背景にせまる**
講師　三尾稔（本館 准教授）

**東京講演会**

会場　モンベル渋谷店5Fサロン
定員　60名（要事前申込、会員無料・一般500円）

第111回　4月11日(土)13時半～15時
**「氷の島」に生きる人びと**
**——グリーンランド・イヌイットの文化と歴史**
講師　岸上伸啓（本館 教授）

極北に位置する、世界最大の島グリーンランド。全島の8割を厚い氷床が覆うこの「氷の島」では、人口の9割をイヌイット系の人びとが占めています。海域の狩猟と漁業を基盤に、寒冷な自然環境に適応した生活を営むグリーンランド・イヌイットとはどのような人びとなのでしょうか。また、地球規模の環境問題やグローバル化、本国デンマークとの関係は、彼らにどのような影響を及ぼしているのでしょう。彼らの文化と歴史、そして現在の様相を併せて紹介します。

■講演会終了後、会場を移動して、関連する展覧会「スピリチュアル グリーンランド」（会場 代官山ヒルサイドフォーラム）の見学を予定しています（1時間程度）。

※国立民族学博物館ミュージアム・ショップの記事は、表紙うらに移りました。

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

# 文化遺産の「国際的」保護
## ——何が正しいのか

佐野真由子
国際日本文化研究センター准教授

「人形浄瑠璃文楽」と「淡路人形浄瑠璃」。よく似た遺産だが、歩んできた歴史は異なる。制度づくりの現場を覗いてみると、さまざまな課題が見えてくる。

### 忘れられない出来事

二〇〇四年二月、淡路島での情景が思い起こされる。わたしはユネスコ本部無形遺産課の職員として、同課のリックス・スミーツ課長（当時）とともに、日本のユネスコ・アジア文化センターが主催する会議に参加するためパリから出張していた。アジア太平洋諸国の文化政策担当官が会合し、前年にユネスコで採択された無形文化遺産保護条約について意見交換する目的で開かれた会議である。

近年の和食や和紙の認定で、この条約に基づく制度は日本でも知られるようになってきたが、当時はまだ各国の批准待ちで正式に発効しておらず、条約の前身となった「人類の口承及び無形遺産に関する傑作の宣言」というプログラムが動いていた。その枠内で、日本からは人形浄瑠璃文楽が「宣言」を受けたばかりの時期であり、会議はその本拠地大阪でおこなわれた。それに付随して、会議参加者一同で文楽の源流たる淡路人形浄瑠璃の一座を訪問する計画が組まれていたのである。そこで、今でも忘れられない出来事があった。

淡路人形浄瑠璃の演目「奥州秀衡有髻壻（おうしゅうひでひらうはつのはなむこ）」鞍馬山の段

### 切り離される「源流」

スミーツ課長が、ユネスコが認定した「人形浄瑠璃文楽」には目の前の淡路人形浄瑠璃が含まれていなかったという事実に、その場で初めて気づいたのである。海外からの会議参加者の一人が人形座の方へ、ごく無頓着に、世界の無形遺産となった感想を尋ねたところ、「いえいえ私どもは認定されておりません」という答えが返ってきたところからの悶着であった。もともと日本政府からユネスコへの人形浄瑠璃文楽の申請は、広範な人形浄瑠璃の伝統のなかで、大阪の国立文楽劇場を拠点とし、（財）文楽協会が管掌する範囲のみを対象としていた。いわば、日本を代表する高度の芸術として頂点を極めた部分のみを取り出した格好である。

淡路人形浄瑠璃の演目「賤ヶ嶽七本槍（しずがだけしちほんやり）」山の段

「その源流」に触れてもらおうとの趣旨で企画された淡路ツアーであったが、じつはユネスコによる認定が知らぬ間に、そうした「源流」を「高度の芸術」から切り離す——切り捨てる——形になっていたことを知ったわたしの上司は、制度づくりの責任者として真に大きなショックを受けた様子であった。以降、このような事態を防がなければならないという彼の決心は固く、結果から述べれば、日本からの次の案件となった歌舞伎に関して、松竹傘下の芸能として確立している「大歌舞伎」に限定せず、一定の様式的条件を満たせば各地の村芝居等を排除しない形で申請させ、実際にそのような認定がなされる大きな要因となった。

### 「善意」という干渉

日本人であるわたし自身は、国際公務員として日本関連の案件を直接担当することはなかったので、憶測を交えて詳細を述べることは控えねばならないが、この経過には、文化遺産保護を国際的に論じようとする場合の根本的な問題が含まれている。研ぎ澄まされた芸術としての文楽だけを取り出して「世界の無形遺産」に推挙する発想（他方、淡路人形浄瑠璃は国の「重要無形民俗文化財」に指定されている）と、あえて言えば泥臭いその源流を含めて「世界の無形遺産」とされなければならないとする発想のどちらに軍配を上げるか、それ自体についても多様な意見があろう。しかし、もっとも大きな問題は、少なくとも当時、前者の傾向が強かった日本の文化行政に対して、ユネスコ側の主張した後者の考え方が、一種の「矯正」力をもったという事実である。

淡路人形浄瑠璃の演目「玉藻前曦袂（たまものまえあさひのたもと）」神泉苑の段

本稿ではこの一例にとどめざるをえないが、国際的制度の形成とともに、各国の文化政策に対し、さまざまな観点からこれに似た指導がなされることは、枚挙に暇がないというより、むしろ通常である。文化政策の基盤が弱く、財政的にも国際援助に頼る傾向の強い国に対しては、その力はより明確に働く。地球上の多様な文化を守るという活動は、その理念とそのための手法を一様に広めようとする「善意」に満ちた教育的指導と一体となっていることを、見落とさないようにしなければならないだろう。

※写真はすべて淡路人形座提供

多文化をあきなう

# 足元から築くフェアな社会——フェアトレードタウン運動

渡辺龍也（わたなべ たつや）
東京経済大学教授
日本フェアトレード・フォーラム監事

フェアトレードを国内の地域社会に根づかせるフェアトレードタウン運動。途上国と先進国とのあいだの「フェアな貿易関係」を超えて、この運動が目指す「フェアな社会」とは。

## 運動の興りと広がり

フェアトレードタウン運動は、二〇〇〇年にイギリスで誕生した、「まちぐるみ」でフェアトレードを広める運動である。まち（地方自治体）の行政や企業・商店、職場、学校、市民団体が、こぞってフェアトレード製品を日常的に使用・販売することを約束し実行するこの運動は、フェアトレードにかかわる多くの人びとを覚醒させた。翌二〇〇一年には「まちぐるみ」であることを確保するための認定基準が策定された（文末参照）。

運動は瞬く間に西欧諸国に飛び火し、アメリカ、オーストラリア、そして日本にも伝播（でんぱ）していった。日本では二〇一一年に熊本市が初のフェアトレードタウンに認定され、名古屋市、札幌市、逗子市、宇都宮市、垂井町（岐阜県）などが次を目指している。世界全体では二五か国（うち三か国は途上国）に一六〇〇以上のフェアトレードタウンが誕生していて、そのなかにはロンドンやパリ、ローマといった首都も含まれている。

## フェアトレードを根づかせる

フェアトレードタウン運動が人びとを魅了し、世界中に広がったのには訳があった。従来のフェアトレード普及活動は、フェアトレード月間やクリスマス等の節目にキャンペーンを打って人びとの関心を高めよう、といった単発的なイベントが多かった。そのため、イベント期間中は盛り上がっても、それが終わると熱気が冷めることの繰り返しだった。参加者同士の有機的なつながりにも欠けていた。一時（いっとき）の「打ち上げ花火」的なイベントや、個々人の「孤独」な倫理的消費の推奨だけでは、持続的・発展的なフェアトレードの普及に至らなかったのである。

フェアな志をもった仲間同士がつながり、喜びをわかち合える場、フェアトレードへの思いを日々あらたにし、それを形にしうる場があってこそ、フェアトレードの輪は広がり、根づくことができる。フェアトレードタウン運動は、まさにそのような場を形成するのだ。その意味でこの運動は、ともすると上滑りになりがちなフェアトレード運動の深化（根づき）と発展に大きく寄与するものといえる。

## 自分たちの足元を見直す

フェアトレードタウンは「勝手に宣言」することも不可能ではないが、一定の基準を満たした市区町村を認定するしくみが各国にできている。基準を満たすことで運動の持続性もずっと増してくる。各国は基本的にイギリスが最初に作った五基準を採用しているが、独自の基準を付け加えている国もある。

日本では「地域活性化への貢献」を加えた。具体的には、「地場の生産者や店舗、産業の活性化を含め、地域の経済や社会の活力が増し、絆（きずな）が強まるよう、地産地消やまちづくり、環境活動、障がい者支援等のコミュニティ活動と連携している」ことを求めている。

つまり、途上国とのフェアトレードを推進するにとどまらず、地場の生産者や産業も大事にし、障がい者をはじめ弱い立場にある人びともイキイキと暮らせるような、「フェア」な経済と社会を自分たちのまちにも実現することを目指しているのだ。

運動は途上国にも広がっている。そこでは、国内のフェアトレード市場の形成・拡大（＝国内フェアトレードの推進）や、フェアトレード生産者への支援も大きな柱となっている。このように、世界的な広がりとともに運動の多様性も増している。フェアトレードそのものに多様性があるように、フェアトレードタウン運動も各地の実情に合わせて多様化するのは自然な流れといえよう。ただ、運動の本筋が、フェアトレードの最大の目的である「途上国の疎外された生産者・労働者の人びとに人間らしい生活を保障する貿易」の実現から外れていかないよう、注意する必要はある。

## すべての商いをフェアに

フェアトレードのもうひとつの大きな目的は、通常の貿易のしくみそのものの変革にある。二〇一五年以降の世界共通の開発目標（ポストミレニアム開発目標）のひとつにフェアトレードを、という運動に呼応して、各国のフェアトレードタウンでは首長（市町村長）や議員に支持を表明してもらう署名集めが繰り広げられた。このように、公正な貿易の実現に向けて、世界一六〇〇余のフェアトレードタウンのネットワークと力はもっと生かしてよいだろう。

そしてフェアトレードの最終目標は、貿易だけでなく、あらゆる取引、商いをフェアなものにすることにある。地域の経済や社会をもフェアなものにし、国内取引もフェアなものに変えていく運動へとフェアトレードタウン運動を昇華させていってこそ、その最終目標は実現可能なものになると思われるのである。

### フェアトレードタウンの5つの基準 (core goals)

1）地元の議会がフェアトレードを支持し、自治体内でフェアトレード製品を使うことに合意する決議をおこなう。
2）地域の商店や飲食店等でフェアトレード製品が容易に購入できたり、提供されたりする。
3）地域の多くの職場や団体（宗教施設、学校、大学など）でフェアトレード製品が利用される。
4）フェアトレードタウン運動に対するメディアの関心や住民の支持が高まる。
5）フェアトレードタウンとしての存続にコミットしたフェアトレード推進委員会が設置される。

熊本市で開催されたフェアトレード・ファッションショー（撮影・鈴木紀、以下同）

熊本市がフェアトレードタウン認定証を授与された2011年6月4日に、市内でおこなわれたパレード

世界初のフェアトレードタウン、英国のガースタング

コスタリカのフェアトレードタウン、ペレス・セレドンの街角

ガーナのフェアトレードタウン、ニューコフォリドゥアの集会所

味の根っこ

フィンランドのソウルフード？

# カレリア・パイ

庄司博史（しょうじ ひろし）　民博 民族社会研究部

卵バターはカレリア・パイにたっぷり盛りつける

## シラクの失言

フィンランド料理といえばおもいだすエピソードがある。二〇一二年のオリンピック（ロンドンで開催）の開催地誘致でイギリスとフランスが張り合っていたころの話である。フランスのシラク大統領が、イギリス料理よりまずいのはフィンランド料理ぐらいだと口を滑らせたことが公になってしまった。以前にも口の悪いイタリアのベルルスコーニに「あんなのは料理に入らない」とこきおろされた経験があったところに、今回の論争では土俵外のフィンランドがとばっちりで大恥をかかされてしまった。もちろんフィンランド人は怒り心頭で、普段おとなしいことで知られる彼らも新聞やネット上では、フランス製品ボイコットを、と息巻いた。彼らもあれこれ反論をこころみたが、結果として、それもそうだと納得した人も少なくなかったようで、彼らの自尊心はまた大きく傷ついてしまったらしい。

とはいえ、フィンランドの食事がそんなまずいというのはあたっていない。素材の味そのままのライ麦パンや、軽く塩漬け発酵させたニシンと、とれたての玉ねぎの輪切りを新じゃがに付け合せたコールドディッシュなどは季節感があって絶品である。とくに空腹のときは、こんなにうまいものもあったのかとおもえるほど満足させてくれる。残念ながらこれらは近隣の諸国でも似たものがあって、フィンランド料理の代表というには特色がなさすぎる。そこで、登場するのがここで紹介するカレリア・パイである。

## フィンランド料理の代表格

カレリア・パイは旅行ガイドには必ず登場する、フィンランドを代表する料理である。観光客も数日滞在すれば一度は口にするはずだ。フィンランド語ではカルヤラン・ピーラッカとよばれ、東の隣国ロシアで食されるピローグ（ピロシキはその愛称）とつながっている。これは日本でも知られているが、小麦粉の生地に肉、魚、野菜を詰め込み焼き上げた小型パンである。薄い小麦粉の皮で肉や野菜を包み、茹（ゆ）でたり揚げたりして食べるロシアのペリメニや中国の餃子も同じ仲間で、中国の饅頭（マントウ）も遠い親戚らしい。ユーラシア大陸の西端にたどりついたのが、このカレリア・パイなのだ。

スーパーで一袋 10 個で売られるものは
小型で一個 50 円前後

それでは、終着点フィンランドのカレリア・パイの特徴とはなにか。味はさておき、自分なら三つあげたい。まず皮がライ麦という点である。そもそもパンといえば小麦というヨーロッパで、ライ麦というのはドイツから北欧にかけての限られた地域である。ロシアのピロシキまで小麦を引き継ぎながら、ライ麦にいれかわったのは、痩せた寒冷地でも育つためであろうか。ふたつ目はその姿だ。ライ麦から作る皮は茶色ないしこげ茶色。詰め物を周囲からひだで包みこんだ扁平（へんぺい）な姿を初めて見たとき、藁（わら）ぞうりを連想してしまった。そして三つ目は肝心の中身。これがなんと米のおかゆかマッシュポテトなのだ。餃子もペリメニもピログも、普通は中身が肉か野菜なので、粉モンのパン生地とも味のバランスがとれている。しかしこのカレリア・パイに限っては、ジャガイモかコメのおかゆ。ご飯をおかずにご飯を食う感じなのだ。

## 味わうのは郷愁？

つきあいのながいフィンランドに憎まれ口をたたいてしまったが、カレリア・パイの真髄はむしろ一見パッとしない素朴さにあるとおもう。立派な祝いのテーブルにも、必ず卵バター（つぶしたゆで卵とバターを混ぜたもの）とともに添えられ、食事の合間、談話の途切れたとき、人びとはさりげなく口にする。うっすらとした塩味は、どんな料理の味覚にも邪魔をせずとけ込み舌になじませる、陰の立役者的存在でもある。こぼれやすい卵バターを丁寧にパイのひだに盛りつけるしばしのあいだ、人びとが想い味わっているのは、田舎の味、家庭の味なのかもしれない。カレリア・パイは、東フィンランドや現在その大部分がロシア領となっているカレリア地方の郷土料理とされるが、失地カレリアへの郷愁とともに今やフィンランドの国民料理、家庭の味となってしまったようだ。初めて食す外国人は少し戸惑わされるが、そんな想いも一緒に味わってほしい。

カレリア・パイ（10 ～ 15 個）

| | |
|---|---|
| パイ皮 | |
| 水 | 100 ミリリットル |
| ライ麦粉 | 150 ミリリットル |
| 小麦粉 | 100 ミリリットル |
| 塩 | 小さじ |
| のせる少し硬めのかゆ | |
| 水 | 250 ミリリットル |
| 米 | 1 カップ |
| 牛乳 | 500 ミリリットル |
| 塩 | 小さじ 1 |
| バター | 少々 |

① 水、塩、ライ麦粉、小麦粉を十分にボールで混ぜ、生地をテーブルの上でしっかりとした硬さになるまでこねる。必要に応じ粉をくわえる。

② 約 10 ～ 15 個の丸いかたまりに分けた①を、ひとつずつ麺棒をつかって、手のひら大の縦長の円形に薄く伸ばす。

③ 皮の表面に、準備した米のかゆをうすく広げる。

④ 左右両側をすこし内側に折りたたみ、皮のふちを親指と人差し指でつまみ、ひだ状にする。

⑤ オーブンに入れ、270 ～ 300 度で 10 分間焼く。

⑥ 焼きあがったパイにバターを薄くぬる。

カレリア・パイは、みんぱくのヨーロッパ展示のパンコーナーに
複製が展示されている

このような本格的なパン焼き窯は、近年もうほとんど見かけない。
フィンランド北カレリア地方

異聞逸聞

# 数々の思い込み

八杉佳穂（やすぎよしほ）　民博 民族文化研究部

**民博は神聖なる修行の場である**

民族学者は人とのつきあいが大切だからか、創立当初のエネルギーのなせるわざからか、一九八〇年着任当初は、パーティがよくあった。仕事をするところは、修行のおこなわれる神聖な場と思い込んできたのだが、神聖な場というのは思い違いであった。しかし民博をパライッソ（楽園）と言った外国人研究者がいたが、自由に研究ができるまさに理想の場であった。さらに、民博の研究者は世界をカバーしており、世界中の情報が自然と入ってきたし、聞けばなんでも簡単に知ることができるじつにいいところであった。自分は人前恐怖症で、人前に出て話をするなんてとてつもなく恥ずかしくかつ恐ろしくて、学問による修行でしか克服できないと思い込んでいたが、まわりに鍛えられたお蔭（かげ）か、人前に出ることもだいぶ気にならなくなり、楽に生きられるようになった。

**サラリーマンと思いきかせる**

直属の第四研究部長であった加藤九祚先生は九時から五時まで働いて、それ以降は酒を飲む主義を貫かれていた。「継続は力だ」を身をもって示しておられた。学者というのは、やるときはやって、やらないときは抜け殻のようになるのをイメージしていたが、サラリーマンのごとく毎日規則正しく民博に来ること、週五十時間、年二千時間は超えること、これを言い聞かせた。土曜日が休みになり、民博滞留時間はだいぶ減ったが、お蔭で、不健康であった体は丈夫になり、体重は三〇キロも増えた。

**中米を任されている**

中米を任されているからには、中米の標本資料や図書資料はできる限り集めなければならないと思い込み、四度も海外収集に出かけた。民族資料はがらくたであるという梅棹初代館長の言をたてに、自由にものを買い集めることができた。人が使うものはすべて本物であるので、鑑定が不要である。その気楽さと引き替えに膨大な量を扱うことになった。マヤ学を始めたものの、その業績は心許ないが、標本資料と図書資料は、世界で有数の博物館になったことはまちがいないであろう。

**特展はやらねばならない**

博物館に勤めている限り、常設展の充実はもちろん、特別展もやらなければならない。そう思って一九九五年に「現代マヤ――色と織に魅せられた人々」という特別展を開催した。それでやめとけばいいのに、民族学のために集められた三〇万点を超す資料が死蔵されているようでもったいなく、利用法を考えているうちに思いがつのり、「千家十職×みんぱく――茶の湯のものづくりと世界のわざ」展（二〇〇九年）をすることになった。協力してくれる人がたくさんいたお蔭で、無事やり遂げることができ、人のありがたさをしみじみ感じたが、二度とも展覧会終了後、深刻な手術を受けなければならなかったのは、自分に向いていないことをやったせいに違いなく、命にかかわる大きな思い違いであった。

**自分はフィールドワーカーではなく、文献言語学者である**

フィールドワークというのは、村に入って、村人と共に生活して、あらゆるものを調べることだという思いが強かったので、あるとき同僚の言語学者が、言語資料はホテルにインフォーマントを招いて集めるのだということを聞いて驚いた。これはいい。危機言語の大調査に同じような調査法を使うことにした。そのお蔭で四巻の資料を作成できた。

わたしは内に向かう人間なので、フィールドワークに向いていない。文献を読むことも苦手である。だから学問は修行と思ってきたのだが、民博にいることができたお蔭で、ふつうでは経験できそうもないことをたくさんやらせてもらえた。

思い込み、思い違いを題材に民博三四年半を振り返ってみると、いろいろなことがまだまだ浮かんでくる。在任中は思い違いで過ごしてきたとさえ思えてくる。体力が衰え、頭脳も衰えていくばかりであるが、まだやり残していることがたくさんある、という思い込みが、衰えていく終末を元気にしてくれるに違いない。

グアテマラのコンセプシオン・チキリチャバで出会ったこの女性は、変わったウィピルを着ていたので、是非譲ってくれと頼むと、脱いでくれた。するとスカートで見えなかった部分に、なんと種まで描いたスイカが織り込まれていた。こんなにできる織り手は見たことがない。1993年。
標本番号 H195577

1995年の特別展「現代マヤ――色と織に魅せられた人々」にて

2009年の特別展「千家十職×みんぱく――茶の湯のものづくりと世界のわざ」の一風景

1995年の特別展「現代マヤ――色と織に魅せられた人々」の一階正面部分

カクチケル語の調査で協力してくれたフアン君とバイロン君とともに。2011年

制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

# 異性をまとう

久保正敏（くぼ まさとし）　民博 文化資源研究センター

異性装、服装倒錯は禁断を犯すこと、社会の秩序を逆転させること。笑いをとるのは、道化に通じるかもしれない。みんぱくの異性装劇プロデューサーが最後に明かす、たくらみ秘話。

## 心理的には誰でも両性具有

異性装、または服装倒錯は、性心理学の分野で一般に、性的興奮を得るため異性の衣裳を着たい、あるいは着せたいという願望から生じるという。また、ジェンダー・アイデンティティ障害を抱える人にもそうした願望が生まれる。

性心理とは異なる文脈でも異性装は多い。宗教的な場面で特に男児に女装をさせて宗教的役割を担わせる、あるいは魔物に子どもを奪われないよう中性的な衣裳を着せる事例がある。西洋では男児に罰を与えるために異性の服を着せる「ペティコートの罰」もみられるようだ。もちろん、芸能の世界だと、すべて男性が演じる歌舞伎、その真逆の宝塚歌劇団、女性も舞台に立つようになったが、依然女形が健在の中国の京劇など、確立したジャンルは周知のとおりである。

そうした人びとを茶化すつもりは毛頭なくとも、遊び心から、ときには別の自分に変身したいという願望は、じつは誰にでもあるようだし、コスプレもそのひとつだろう。いわば、心理的には誰でも両性具有といえるかもしれない。

## 趣味としての女装クラブ

趣味として女装する人たちが集まるクラブ組織も存在し、日本では一九七八年創業の老舗「エリザベス」が有名だ。この存在をわたしが知ったのは、秘宝館調査の一環で、川崎市は金山神社の「かなまら祭」を取材したときである。

鍛冶の守護神である「かなまら」すなわち金属製男性器がご神体のこの神社は、鉄工業や金物店の多いこの地域で信仰を集め、同時にフイゴや火床（ほど）は性とかかわるため、下の病除けや夫婦円満でも信仰も集めている。この神社で毎年四月の第一日曜日、満開の桜の下で大々的におこなわれる「かなまら祭」、そのクライマックスには男性器を乗せた神輿（みこし）が商店街を練り歩くが、エリザベスもピンク色の「エリザベス神輿」を金山神社に奉納してあり、祭の際にはエリザベスのメンバーたちがそれを引き出してかつぎ「かなまら！ でっかい○○」とかけ声をかけて行進に加わる。

この祭は、近くの羽田に進駐していた米軍の英字新聞に奇祭として紹介されたり、テレビ番組「11PM」にとりあげられるなどで有名となり、今では東京近辺の米軍基地関係者がバスを連ねて押しかけ、お花見を兼ねた大勢の地元の人たちと混じり合い、あちこちで笑い声があがる、まことに大らかで賑（にぎ）やかなお祭だ。エリザベスは、専門メークアップ・アーティストを擁する本格的女装クラブだが、この祭においては笑いをとるのが主眼のようで、見まがうほどしっかり女装している訳ではない。

新体操（2000年）
日本製には合うものがなく、オーストラリア調査の際にわざわざ入手したXXLサイズのレオタードを着用したわたし

## 男装の麗人への女装

わたし自身も、笑いをとる目的で、高校時代に文化祭でのクラスの演（だ）し物に、男女すべて衣裳を逆転した「西遊記」をプロデュースし、級友のノリが良くて大成功。民博奉職後も、年末におこなわれるパーティーでは同僚を巻き込んだ異性装コント「偐浦島（にせ）」「贋作（がんさく）白雪姫」などをプロデュースしてきた。近年は、自身で女装瞬間芸を披露し、結構受けをとっている。昨年末には、宝塚歌劇団創設一〇〇周年に引き寄せて、「ベルサイユのばら」のオスカルを演じたが、この場合、男役の演じる男装の麗人にわたしが扮（ふん）するのは、二重の倒錯といえるのか？

儀礼の場面など、日常秩序が一時的に解体してから再び日常にもどるまでの境界的状況を、英国、後に米国の文化人類学者ターナーは「リミナリティ」と名付けたが、わたしは象徴二元論で割り切れないこの境界領域にこそ文化の機微が宿ると考えている。そういえば、宝塚に育った手塚治虫も、宝塚歌劇に触発されてか両性具有をテーマとする『メトロポリス』や『リボンの騎士』を描いた。もっともわたしの場合は、単に関西人らしく笑いをとり、レジェンドとして語り継がれれば目的は達せられるのだが。

ドイツの写真家ヴィルヘルム・フォン・グレーデンが撮影した女装した少年。*Sicilian dress* (a boy disguised as a girl). Taormina, circa 1895年

幕末から明治前期の画家、月岡芳年（つきおかよしとし）が描いた女装した小碓皇子（おうすおうじ。倭健命（ヤマトタケルノミコト））。月岡芳年『月百姿』より「賊巣乃月 小碓皇子」1886年

かなまら祭のエリザベス神輿（1995年）

大正女学生ロマン（1997年）
岐阜県恵那市明智町の日本大正村見学の際に天啓を得て年末パーティーの司会を務めるわたし

月刊みんぱく 2015 3月号

## 編集後記

冬ごもりの虫が地上にはい出る「啓蟄（けいちつ）」の季節、ということで、人と虫の愛憎について特集した。虫は別に人が憎くて刺すわけではないし、愛しているから甘い蜜を与えてくれるわけでもない。「益虫」も「害虫」も人間様の勝手なカテゴリーで、人の都合によって益虫が害虫になったり、その逆の場合もある。わたしの友人である中村和恵さんの詩集『天気予報』に、「ごきぶりに悪意はないし、みみずに善意もない」の一節がある。なるほど。人間はどうして、こうも勝手に感情移入をするのか。しかし、そこが人間らしさでもあるのだろう。

さて、本号にご寄稿くださった久保、庄司、八杉教授は3月末でみんぱくを定年退職される。あえて「退職記念エッセー」とうたわずに、さりげなく既存のコーナーに思いをつづっていただいた。このお三方、じつはみなさん月刊みんぱく編集長を経験されているのである。小誌の存続に多大な貢献をされたベテランが一度に三人も去るは寂しい。（山中由里子）

●表紙：絵画「蜂蜜つくり」
地域：タンザニア　標本番号 H0170760

**次号の予告**

特集

**野次と喝采**

※みんぱくウィークエンド・サロンの情報は、13ページに移りました。

## みんぱくをもっと楽しみたい人のために――会員制度のご案内

### 国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

### みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

### 国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

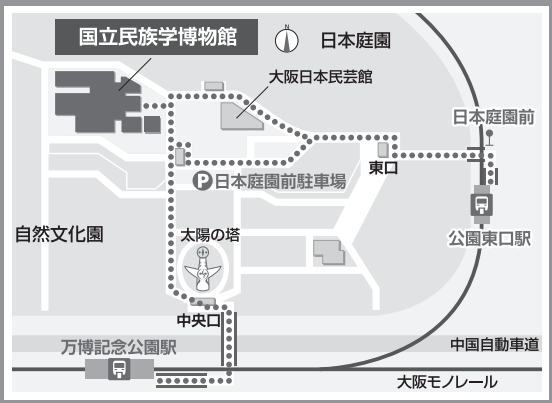
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

月刊みんぱく 2015年3月号
第39巻第3号通巻第450号　2015年3月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　河合洋尚　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　丸川雄三
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。




交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology